

フィールド競技



フィールド競技審判員

1 審判長、主任の任務と権限 (CR18, CR19)

競技開始前の準備

審判長	主任
① プログラムの競技注意事項および監督会議での申合せ事項等を確認し、競技運営が円滑に行われるようにする。 ② 審判員の出席状況ならびに班編成を確認し任務、権限の徹底を図る。 ③ 競技会当日の風向きを考慮し、助走方向やピットの位置を決定する。 ④ 競技者が同時に2種目以上の競技に出場する場合、その許される範囲、許されない範囲を確認しておく。 ⑤ 大会前にカメラマンのエリアを確認しておく。 ⑥ 器具類等、物品のチェック。 ⑦ インカム、端末機、科学計測装置の動作確認チェック。 ⑧ トラブル発生時の伝達方法の確認。 ※ WRK対象競技会では、本連盟検定品かつWA認定品のみを使用する。	① 審判長と連携をとり、審判員主任の役割を確認する。 ② あらかじめ、審判長からその権限の一部の委任を受けておく。 ③ 主任会議に出席し、関係役員との連携をとるとともに、申合せ事項を各審判員に徹底させる。 ④ 審判員および補助員を掌握し、それぞれの任務分担を明確にして指示する。問題があるときは審判長に報告して解決を図る。

2 審判員の行動

すべてのフィールド種目

- ① 審判員は競技場内において周囲（他人）を委縮させたり不快にさせる言動には特に注意する。
また配置につくまでの歩行、旗の挙げおろし、測定時の態度、椅子の坐り方、着地判定員の立っている姿勢など、その1つ1つが観客から見られていることを念頭において審判にあたる。
- ② 任務中、他の競技に気をとられないこと。大きな歓声があがると思わずその方向に目を向けてしまいがちであるが、もしその瞬間に踏切ったり投げた投てき物が落下した場合は、踏切り足の痕跡や落下物の痕跡判定などに、絶対の確信を持つことができない。
- ③ 首をかしげながらの判定は絶対にしない。跳躍競技では踏切り

判定、投てき競技ではスターティングライン、足留、またサークルから出るときの判定、投てき物落下点における痕跡の判定などで首をかしげながら判定動作は周りに不信感を与える結果となる。

- ④ 競技中に競技者を指導してはならない。また、踏切位置を教えることもしてはならない(助力となる)。
- ⑤ 練習開始時からスムーズに運営することを心掛け、競技者にストレスを与えず、各競技者がパフォーマンスを十分に発揮できる雰囲気づくりに配慮する。迷惑を及ぼすような行動をとったり、審判運営を害するような言動をする競技者には厳しい態度で臨む。
- ⑥ 規則に反する競技者には理由を明確にして注意を与える。他の競技者に迷惑を及ぼすような行動をとったり、審判運営を害するような言動をする競技者には厳しい態度で臨む。

悪天候(雨天)時などの準備

すべてのフィールド種目

① 競技者の控所

風のない場合は天幕だけのテントでも良いが、横なぐりの風雨の場合は三方を囲んだ三方幕が必要である。テントならびにビーチパラソル等を張る場合は常にトラック競技の進行を考え、競技運営に支障をきたさないよう配慮する。また、トラック側ぎりぎりに設置することについては、トラック、フィールド双方の競技者にとって危険であるので配慮する。

② 用器具の保護

特に棒高跳のポール、投てき競技の用器具については雨に濡れないようにテント、ビーチパラソル等を設置することが必要である。その他にも雑巾等を用意して、滑ることによる危険の防止にも注意を払うべきである。

③ 記録用紙の保護

プラスチック製の記録用机がない場合、透明のビニール袋を用意するなどの工夫をする。

④ 審判員の服装

完全防水のフード付雨具が望ましい。傘をさしての審判は危険防止また観衆への配慮からも行ってはならない。

⑤ 用器具の手入れ、返納

競技終了後、用器具は十分手入れをする。例えば巻尺は一度全長に伸ばし、雨天時は特に泥水の除去、油を少量含ませ軽くこするなどする。

特にフィールド用の科学計測装置は水に対して弱いので、取扱いは注意する。

競技中の留意点

審判長	主任
① 進行担当総務員との連絡を密にして競技運営，進行に万全を期す。	① 審判長より委任された任務は責任をもって処理するとともに必ず審判長に報告する。
② 警告，除外の権限を行使するときは理由を明確に伝える。	② 決定を下すのに疑問を生じ，決定できないような事柄は審判長にその決裁を求める。
③ 競技中の危険防止に対する監視を行い問題点に関しては迅速に対応する。	③ 新記録に挑戦するときは必ず計測に立会い責任をもって記録を確認する。その場合は審判長に報告，またアナウンサーにも連絡する。
④ 記録用紙にサインするときには誤りがないか点検する。特に手書きの記録用紙を横に見て，最高記録や風力の記載に間違いがないか確認する。また，記録用紙を縦に見て，順位や上位8人（以下TOP8とする）に間違いがないか確認する。	④ 透視計測器，科学計測装置等にトラブルが発生したときは審判長に連絡し，競技を遅延させないよう最善の策を講じる。

3 世界記録，日本記録が誕生した時の対応

審判長	主任
① 世界記録・日本記録が生まれた場合は，CR31，CR37に記載されている内容により作成した申請書に署名する。日本記録（オリンピック種目のみとし，U20-U18，ショートトラックは含まない）が樹立された場合ドーピング検査を24時間以内に受けさせる必要がある。	① 記録は3名のフィールド競技審判員が検査済みの鋼鉄製巻尺または高度計で正確性を確認する。あるいは科学計測装置を用いて計測され，正確性が確認されなければならない。
② 投てき種目においては，世界（日本）記録と同等か上回った場合，投てき物が規則に合致しているか再度検査を行い確認する。	※鋼鉄製巻尺で計測する場合は，試技を計測する審判員，巻尺を引っ張る審判員，巻尺の0の位置にピンを合わせる審判員の3人で記録の正確性を確認すること。

- ② 高さの跳躍では試技でバーに触れた場合、複数の審判員でその次の試技の前に確認する。
- ③ 距離の跳躍では走幅跳、三段跳では平均秒速追い風2m以下であること。世界記録公認のためには非機械的（超音波）風向風速計を使用していること。
- ④ 投てき種目では予め投てき器具に番号をつけておき、毎試技ごと誰がどの器具を使用したかチェックしておくといふ。

アスリートビブス、商標広告について

すべてのフィールド種目

① アスリートビブス

競技者は TR5.7に定められているように、アスリートビブスをつけなければならない。違反者には注意を与え修正させなくてはならない。跳躍競技では胸または背のどちらかにつけるだけでよい。

② 商標、広告等

競技者は「競技会における広告および展示物に関する規程」に反する商標、広告等といった服装、所持品を競技場内に持ち込むこと



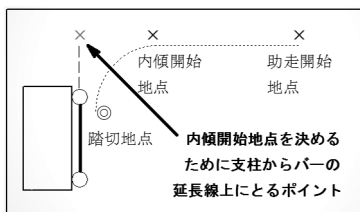
は許されない。これに違反した競技者には注意を与え、違反している商標、広告等にはテープを貼るなどをして違反となっている部分を隠す措置をする。

マーカー

すべてのフィールド種目

- ① 主催者が準備したものまたは承認したマーカーを走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、やり投では2個まで、それ以外の種目では1個使用できる (TR25.3)。

【point】 走高跳は支柱の延長線上にもマーカーを置くと規定数を超えてしまうことがある。競技開始前1人当たり2個までのマーカーが使用できることを確認する。TOP8試技開始前には終了競技者のマーカーを撤去させる。



禁止事項 (TR25.2)

すべてのフィールド種目

- ① 競技が開始されたら競技者は練習の目的で次のものを使用することはできない。

- (a) 助走路や踏切場所
- (b) 棒高跳用ポール

【point】国内ルールとして(b)は審判長が特に認めた区域において使用可能としている。例えば、競技者間の競技能力に著しい差があり、1時間以上経過してから当該競技者の試技が開始される状況下で許可した事例が報告されている。その際に練習を認めた区域の安全をきちんと確保する必要がある。審判長が認めていない場合ポールを持つての練習はできない。

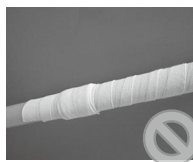
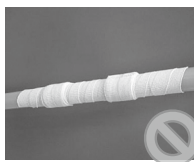
- (c) 投てき物
- (d) 投てき物を持つ、持たないに関係なく、サークルや着地場所を使用することはできない。

【point】審判長はじめ審判員は競技中の危険防止に対する監視を行う。

助力 (TR6)

跳躍審判員	投てき審判員
① 競技者が競技場外に出て監督やコーチの指示を受けたり、監督やコーチが競技場内に入って助言をしたりするのは規則違反であり、文書をもって助力することも規則違反となる。 ② 競技者は競技中でも競技場所からだけでなく、競技場所を離れてスタンド下まで行き、競技場外の監督、コーチと会話することが許されている（競技中の離脱 (TR25.19)）。ただし、フィールド内で競技中の競技者が、周回レース中のトラックを不注意に横切らないよう審判員の許可を得て、あるいは審判員が伴うなどの注意が必要である。監督らが撮影したビデオ装置等を競技者が受け取り、競技者自身が操作することが、監督らの近くであれば認められることになった (TR6.4.5)。ただし、競技場内に持ち込むことは規則違反である。その他の物品の受け渡しもしてはならない。競技場の構造によっては、競技者がスタンド下で撮影したビデオ装置等を受け取れないことも考えられ、対応できないこともある。しかし、適切な場所にコーチングエリアを設置するなどして対応したケースもあり、競技場の特性に応じて工夫していただきたい。 ③ 競技者同士での助力が見られたときや、他の競技者に公平を欠くような内容のときは注意を与える。 ④ <u>棒高跳</u>では手袋の着用が認められる (TR28.3)。 ⑤ <u>棒高跳</u>ではボックスの周りにクッションを置くことができる。かかる用具の設置は、競技者の試技に割り当てられた時間内に行わなければならない。競技を終えた後、直ちに当該競技者が取り除く。	④ <u>投てき競技</u>において、試技を行う際に身体に重りを装着する等、何らかのかたちで助けとなる器具を使用することは認められない (TR32.4)。また、手や指にテープを使用する競技者がいる場合、競技開始前に審判員主任が確認する。 ⑤ <u>砲丸投と円盤投</u>で、競技者がチョーク等の物質を器具につけることは認められるが、ぬれた布で簡単に拭きとれ、後に残らないものでなければならない (TR32.5)。また、チョーク等の物質を靴底につけることも認めてはならない。
⑥ <u>棒高跳のボールにおけるテープの巻き方注意</u> ボールの握りの部分（手を保護するため）と下部（ボールを保護するため）にはテープあるいは適切な物質で幾重にも巻いてもよいが、握り部分のテープは必然的に重なり合う部分を除き均一	

でなければならず、ポールにリングを付けたような太さが突然かわるような状態にしてはならない。従って、下図のようにテープを凹凸に巻くような行為は規則違反となるので、注意が必要である。



事故防止

跳躍審判員	投てき審判員
① 練習のときでも競技中であっても、競技者を砂場付近、投てき物落下地点付近に近づけさせない。 ② 審判員も不用意に助走路に立ち入ったり、着地場所（落下地点）に立っているとみなす事故を起こすので注意する。 ③ 走幅跳、三段跳においては砂場の先にフィニッシュタイマー用の光電管が設置されている状況が多いので、走り抜けた競技者がそれらに衝突しないようコーンやテープを張って安全を図る。	③ 投げられた投てき物から目を離さないようにする。 ④ 円盤投、やり投の判定には常に風向、太陽光線に注意して風上から判定する。

- | | |
|---|---|
| <p>④ 棒高跳ではボールの曲がり具合によって跳躍した競技者が思わぬ方向に飛び出ることがあるので、マットの周りには計測用具や備品類を置かないよう注意する。</p> | <p>⑤ 円盤投、ハンマー投において思わぬ方向に用具を手放すことがある。角度、距離的に危険な場所で他の競技が行われているときは、その付近に審判員を配し他の競技者ならびに審判員にも注意を喚起する。それでも予想外に大きくそれて投げられた場合は「危ない」と大声で叫ぶ。</p> |
|---|---|

アナウンサーとの連携

すべてのフィールド種目

- ① 競技開始、終了の審判員合図とアナウンスを同調させる。
- ② 競技会は目の前で展開されるトラック競技に目をとられがちである。フィールド競技を盛り上げるために、その進行状況をできるだけアナウンサーに連絡し、状況を観衆に伝えるよう心がける。好記録や新記録が出たとき、好記録や新記録が期待されるときには速やかにアナウンサーに知らせ大会を盛り上げるよう努力する。
- ③ TOP8が決定したら、できるだけ早くアナウンサーに知らせることが大切である。ナンバー、氏名、記録を知らせれば良い（情報処理システムを使用していない大会では記録用紙の原票を1枚余分にコピーしておき、それをアナウンサーに渡すことも一方法である）。

報道関係者との接触

すべてのフィールド種目

- ① カメラマンのエリアを確認しておく。カメラマンは決定的瞬間を撮ろうとするあまり、事前にとり決めてある禁止区域に立入ることがあるが、これが競技者に心理的影響を与えることもあり、また競技運営上も危険である。
- ② 危険防止と運営上の見地から約束を守らないカメラマンがいたら、一時競技を停止してでもエリアを守らせる。審判をしながら報道関係者の整理はなかなか大変なことであり、判定に集中しているときでもあるのでお互いに言葉が荒くなりがちであるが、マーシャルと連携をできるだけ密にして整理をしてもらうと良い。

同時に2種目以上出場する競技者の取扱い (TR4.3)

すべてのフィールド種目

- ① 競技開始前に必ず申し出るよう指導する（競技者係からの情報の再確認）。申し出があった場合、審判長は競技会に先立って決めた順序によらないで、試技を許すことができる（審判長のこの権限は、あらかじめ主任または競技者担当に委譲しておくが良い）。
- ② 試技順を変更する場合は公平の原則から他の競技者にも伝えて周知させるべきである。
- ③ 同時刻に2種目の競技を兼ねる場合、いずれの競技種目を優先させるか競技者自身が決めることであるが、トラック競技と兼ねているときはトラック競技が優先となる。
- ④ 競技者が与えられた試技順（変更を含めて）に不在のとき、その試技時間が過ぎればパス扱いなる。
- ⑤ 高さを競う競技では〔国内〕適用により、事前に申告しておくことで無効試技扱いにすることが可能である。ただし、WRk対象競技会では、パス扱いにしなければならない。他種目へ移動する際に、試技順に間に合わない場合はその試技をパスにするか、無効試技にするか確認しておくことが大切である。

高さを競う競技での同時申し込み競技者の扱い

高さを競う競技で、他種目と掛け持ちしている競技者に対して、審判長の判断で各試技に一度試技順を変更することが許される。

例えば1m80の1回目最初に跳躍させたが失敗し、その後他の種目に行き、戻ってきたら2回目の最後に試技させるといった方法である。ただし、2回目に間に合わない場合も有りうるので、その時の扱いを「パス扱い」にするか「無効試技扱い」にするのか本人に確認しておく必要がある。

「パス」はその高さを試技しないことなので、その高さの途中で戻ってきても次の高さまで試技することができない。「無効試技扱い」にすると、その高さの途中で戻ってきた場合、残りの回数を試技することが可能であるが、戻って来なかった場合、呼び出しに合わせてタイマーが作動し、所定の時間が過ぎたら赤旗が挙がり無効試技となる。

仮に3回目に戻ってきたら、残り1回の試技が許されるが、3回連続で無効試技となった場合、その時点で競技終了となる。

なお、何の確認もできなかった時は「パス扱い」とするが、他のすべての競技者が競技を終了していて、ある競技者がその場に不在の場合、与えられた試技時間が経過した後、審判長は「無効試技」と見なすものとする（TR4.3）。

4 審判員の任務

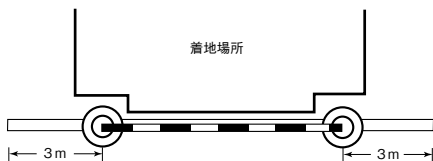
準備

跳躍審判員	投てき審判員
① 競技ができるよう必要な器具、器材をセットする。 ② 計測に関係する器材および場所は入念に点検する（招集完了30分前に完了）。	
(a) 走高跳では両支柱間と外側に規則で定められた白線を引く（TR27.2.2〔注意〕）。	(a) 投てき場の角度線は正確でまっすぐなラインを設置する。
(b) 棒高跳のマット設置に関しては、ポールがマットに触れないようにする。	(b) 投てき角度線内の距離線は出場競技者の記録を考慮し5m毎または10m毎とする。出場競技者が投てきする際（観衆が見るため）の目安となるように、適切な数の本数の距離線を引く。例えば競技者の記録が幅広い（40m～70m）場合は、4本程度の距離線が必要である。ただし砲丸投は1m毎とする。
(c) 棒高跳ではボックス先端に沿ったマット上に白線を引く（ゼロライン）。さらに助走路に沿ってゼロラインから適切で安全なディスタンスマーカーを設置する。	(c) 予選通過標準記録を示すラインは黄色で、大会記録等は赤色とするのが望ましい。
(d) 透視計測器、科学計測装置等の使用法については事前に熟知、練習しておく。また計器類は精密機械であり取扱いは慎重にする。	
(e) 科学計測装置は計測員と連携して設置場所を決める。	
(f) 器具の取扱いを慎重にして計測の正確性を期す。	
③ 風力計測員、科学計測員、アナウンサーなど関係役員と連絡をとり、開始予定時刻に競技が開始できるよう配慮する。	

④ 補助員に対する指導

- (a) 補助員は自分の分身と考え親切に指導するとともに、常に行動を見守って正しい行動ができるように配慮する。
- (b) 必ず安全第一であることを周知徹底する。投てき場では投げられた投てき物から絶対に目を離さないように指導する。練習投てきの際も危険を伴う。身の危険を感じた場合、すぐにその場を離れることを指導する。危ない場合は競技役員・補助員間で声を掛け、ただちにその場から離れるようにする。
- (c) 判定に関する部分を補助員に担当させることはできない。また公正・公平の観点から、例えば砂ならしなどは短時間で平らに整地するよう指導するが、補助員まかせにせず、審判員が最終チェックをすることが必要である。
- (d) 次競技者の呼び出し、手動記録表示板・TOP8表示板の操作、落ちたバー直し、投てき物の運搬等、補助員の任務は競技会の規模、性格に応じて多岐に渡る。将来の公認審判員取得を目指すきっかけとなるように興味・関心を引きつけさせると共に、必要なルール理解の指導も行えると良い。

走高跳の支柱間と外側の白線



留意点：地面に引く白線の助走路側の端をバーの助走路の面に合わせ、白線は支柱間にも引く。

(跳躍せず白線を踏んだり踏み越えたりした場合は無効試技)

棒高跳のゼロラインの引き方

走高跳と同様に棒高跳においても助走路側と着地場所側の区分があり、これを定めるラインを「ゼロライン」と呼ぶ。これはボックスのストップボード内側上縁の垂直面が基準で、これを越えた地面または着地場所に、バーを越える前にポールあるいは身体が触れると無効試技となる。

この境界を明示するために、助走路の中心線と直角に幅10mmのラインを引かなければならない。着地場所のマットの上、さらに支柱の外側まで延長しなければならない。この長さには規定はないが、本連盟施設用器具委員会が定めたところによると500mm程度としている。

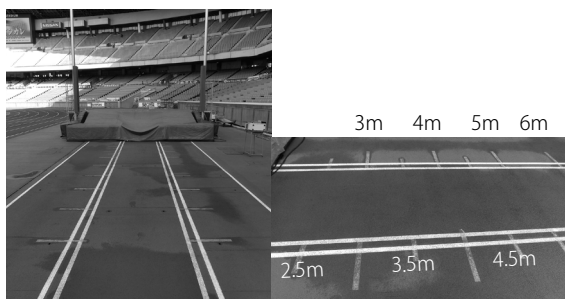


棒高跳のディスタンスマーカー

ルール上はTR25.3.4の国際扱いとなっているマーカーだが、このマーカーは競技者、コーチに対しても有効なものであることから国内競技会でも設置することを推奨する。

〈設置方法〉

助走路に沿って「ゼロライン」から2.5m地点をはじめとし5mまでは0.5mごとに、5mから18mまでは1mごとに設置する。



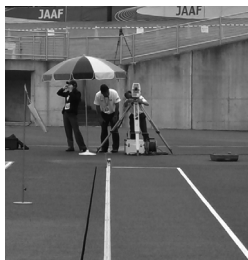
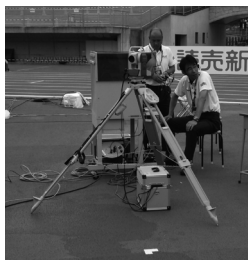
やり、円盤、ハンマー投距離線



砲丸投距離線



科学計測装置の設置



公認審判員

公認競技会と公認記録

競技会役員

トラック競技

フィールド競技

科学計測装置の作動確認

フィールド競技の記録計測に科学計測装置を使用する場合は、競技の開始前に数カ所のポイントを定めて鋼鉄製巻尺による計測を併行して実施し、値の一致を入念に調整・確認する。従来は、競技終了後に再度計測し、競技開始前の計測結果と一致しているかを確認する必要があったが、2020年からは鋼鉄製巻尺を用いることなく、予め点検用ポイントを決めておき、そこを確認することで済ませることができるようになった。確認結果は科学計測装置確認書に残す。

尚、トラブル防止で気をつけたいことは、夏季には内部温度が上昇し、機器が熱暴走を起こすことがあるので、パラソル等で日よけをすること、直接ウレタン舗装面に機器を置かない処

科学計測装置確認書				
EDM / VDM				
※どちらかに○をつける				
種 目				
実施日 年 月 日				
競技開始前確認時刻				
計測ポイント	A	B	C	その他の場所
科学計測装置				
鋼鉄製巻尺				
(単位：m)				
競技終了後確認時刻				
計測ポイント	A	B	C	その他の場所
科学計測装置				
(単位：m)				
略図（踏み切り板・投てきサークル・投てきスタートラインを念頭として計測ポイントをスワッチする）				
審 判 長				
科学計測員主任				
計 測 担 当 者				
J T O				
※ EDM：電子光学距離測定装置 ※ VDM：ビジュアル距離測定装置				
(JAAF-37, 2023/03)				

置をすることが必要である。

さらに雨天時には反射鏡に水滴が付着しないよう配慮することもある。

競技中何らかの計測装置トラブルが発生した場合、痕跡の確保には十分配慮する。また、トラブル防止の観点から痕跡側審判員は、計測結果との整合性にも気を配る必要がある（トランシーバー等、通信機器の利用）。各ラウンド終了後に点検用のポイントを確認するとよい。

審判員構成と配置

走高跳



棒高跳



走幅跳・三段跳



砲丸投



円盤投・ハンマー投



やり投



ハンマー投用囲いの設置に関する留意事項

ハンマー投用囲いの設置については TR37 に詳細が規定されているが、競技場に備え付けられている設備の形状がそれぞれ異なるので、実際の競技会では技術総務の指揮の下、ルールに沿う形で運用されている。特にサークル前方の囲いに接続される可動パネルの運用については、危険防止の観点からも厳格に行われなくてはならない。

ルール通りに運用すると、写真の通りパネルによる圧迫感を感じるが、競技者は普段の競技会から慣れるしかなく、競技会運営も対応していかなければならず、この位なら安全だろうという審判員の感覚による判断ではなく、あくまでもルールに沿った設置を行うことが重要である。

可動パネルをどの位置まで閉じるかについては、あらかじめそのポイントを技術総務と打合せし、ルールブックに示された図に基づいてマークすることが必要で、反時計回り、時計回りで投げる両方の競技者に対応できるようにする。



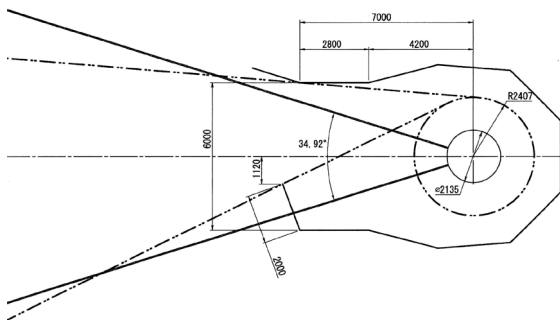
ハンマー投囲い補助ネットの設置方法について

観衆、競技役員、競技者の安全を確保するために囲いを設置する。このため囲いが大型化され、左側の可動パネルは反時計回りで投げる競技者、右側のパネルは時計回りで投げる競技者に使用する。

反時計回りで投げる競技者のときには、左側の可動パネルを投てき角度線の中に入れる。この時左側のパネルに当たらなくても、角度線の外側にハンマーが飛んでいくので注意が必要である。逆に右側のパネルでは、パネルが無ければ角度線内となる投てきがパネルに遮られるデッドスペースがある。これは反時計回り、時計回りで投げる両方の競技者の投てきエリアを同じにするためである。

可動パネルが一体となっているハンマー投囲いの場合、投てき角度 34.92° の中心線から 1.12m 外側の位置に可動パネルの先端が来るように設置する。その位置はサークルの中心点から 7.00m （台車の位置は 7.682m ）離れた位置である。

----- R2407サークルの中心からの軌道



一方、一体的でない囲いの場合、補助ネットを可動パネルの代わりに使用することになる。その際、囲いの前方の支柱に合わせて設置しようとする、台車同士がぶつかり、移動作業に困難をきたすことが多い。また、囲い本体と補助ネットの間に

隙間ができ飛び出すことがある。

そこで今回、一体的でない囲いの補助ネットの置く位置を20mのメジャーで決める方法を紹介する(次項の図を参照)。

1 中心線から1.12mの位置(Bポイント)

- ・サークル中心の右端にメジャーのゼロとする。
- ・Bポイントの方向にメジャーを6.734m伸ばす。そこからサークル中心の左端に向かってメジャーを6.326m伸ばし、メジャーの目盛り13.060mを押さえる。三角形の頂点がBポイントとなる。

※サークルの中心の右端にメジャーの目盛りを0mとしてBポイント方向に6.734m伸ばし、もう一つメジャーを用意し、サークルの左端の目盛りを0mとしてBポイント方向に6.326m伸ばす。二つのメジャーの交点がBポイントとなる。

2 反対側の間口の位置(Aポイント)

- ・サークル中心の右端にメジャーのゼロとする。
- ・Aポイントの方向にメジャーを7.215m伸ばす。そこからサークル中心の左端に向かってメジャーを8.189m伸ばし、メジャーの目盛り15.404mを押さえる。三角形の頂点がAポイントとなる。

※サークルの中心の右端にメジャーの目盛りを0mとしてAポイント方向に7.215m伸ばし、もう一つメジャーを用意し、サークルの左端の目盛りを0mとしてAポイント方向に8.189m伸ばす。二つのメジャーの交点がAポイントとなる。

右左両側に設置すべき位置に目印をつけておき、作業がスムーズに行えるようにすることが肝心である。

このようにすることで移動がスムーズになると共に、いわゆる、ハンマーを引っ張り過ぎてしまった場合でも補助ネットが遮る範囲が増え、安全が増すエリアも増え、一体的な囲いとはほぼ同じ投てきエリアとなることになる。また、競技者が圧迫感を感じることも少なくなる。

もちろん、こうすることで事故がゼロになるわけではなく、

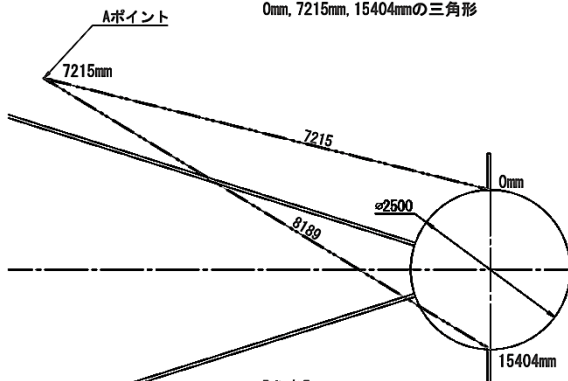
競技者を含めた現場審判員の安全に対する意識の高さと連携が必要なのは言うまでもない。

第三角法

----- Aポイント

円盤サークルセンター右端～左端

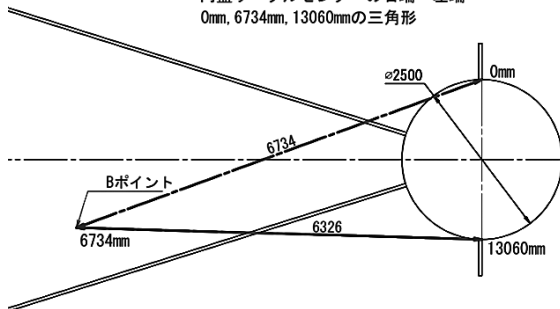
0mm, 7215mm, 15404mmの三角形



----- Bポイント

円盤サークルセンターの右端～左端

0mm, 6734mm, 13060mmの三角形



【参考】

各角のメジャー位置

0mm⇒6734mm⇒13060mm

5 競技者の待機場所

競技者は招集所で点呼を受けた後、競技者係やマーシャル等の先導により各競技場所へ誘導される。トラックの外側に設置されたピット(走幅跳や棒高跳等)では、ダッグアウトに入ることもあるが、フィールドの中で行われる種目では、テントやベンチが用意されていることが普通である。



練習

跳躍審判員	投てき審判員
① 入場した競技者に競技前の練習時間を与え、適正な準備で競技に臨めるよう指示する。 ② 競技場に入ってきた競技者を公平に効率よく練習させるには、次のようなやり方で指示すると良い。 (a) 「競技者全員集合」と声をかけ、「練習はプログラムに記載された順序で行う」 (b) 「練習1回目。何番」「次何番」「何番準備」というようにするのが公平で安全な方法である。 ③ 高さの競技では申合せた練習の高さを準備し、プログラムに記載された順序で練習をさせる。	③ 待機場所付近で、投てき物を持って勝手に練習をさせないよう十分に管理する。

フィールド競技の練習試技時間と待機選手の管理

招集所で最終コールを受けたフィールド競技者は、それぞれの競技場所に誘導され練習方法などの説明を受けた後、公式練習を行う。種目の特性によって多少の差はあるが、通常は2回の練習機会が与えられる。これは最小限であり、時間が許すなら、一部またはすべての競技者による追加練習は認めるべきである。

走幅跳や三段跳、あるいは砲丸投等、ピットやサークルに入ってから直ぐに練習試技が開始できれば良いが、特にハンマー投ではサークルの中でのスイング練習や、投げずにターンの練習だけを何度も繰り返し行うなどの例が多数報告されている。これでは競技開始が遅れるばかりでなく、他の競技者に対しても著しく公平性を欠くこととなる。

こうした行為を防ぐためには、練習試技からタイマーを作動させ、1分が経過したら赤旗を挙げて練習終了を宣言する方法が有効である。突然「赤旗」を挙げられれば競技者は混乱するかもしれないので、練習開始前の諸注意の中で説明し、徹底しておくことが必要である。定刻の競技開始まで時間が残っている場合は、希望者に追加の練習試技を与えても良い。

投てき競技の練習及び競技中、選手待機場所付近での投てき物や代替用具を保持しての練習を度々見かけるが、これは審判団が競技区域の方向にのみ意識が集中していて後方の状況を充分に把握していない場合に多い。

競技が開始されたら、器具を持っでの練習は規則で禁止されており、また事故防止の観点からも選手の待機場所周辺を監察しながら管理する審判員を置くことが望ましい。

競技者のベンチへの座らせ方

競技者は招集所で点呼を受けた後、競技者係やマーシャル等の先導により各競技場所へ誘導される。トラックの外側に設置されたピット（走幅跳や棒高跳等）では、ダッグアウトに入ることもあるが、フィールドの中で行われる種目では、テントやベンチが用意されていることが普通である。

この時、ベンチの座る位置についてまで指示することはあまりなく、競技者の自由に座らせている場合が多いのではないだろうか。しかし、ややもすると荷物を広げて自分のスペースを余分にとったりする競技者もあり、それが原因でトラブルに発展してしまうケースも少なくないようである。

この対応として、ベンチにあらかじめ試技順を示すカードを貼っておき、それに従って座らせる方法がある。

この方式であれば皆平等となるし、試技順を間違えるといったことも少なくなる。



次の競技者の待機場所

中学生や高校生の競技会では参加人数が多く、走幅跳や三段跳では、A、B2つのピットを使用することがよくある。その時ピットが隣接していることからベンチ付近では大変混雑する状況が生じがちである。そして、呼び出しの声が聞こえなかった、気が付かなかった、そのためタイムオーバーとなり無効試技になってしまった、と抗議に発展するケースが起こりがちである。

そのようなトラブルを防ぐための方法の一つとして、試技順を示した流し用紙をベンチ付近に掲示し、自分の順番まであとのくらいあるか把握させることが有効である。さらに、助走の開始位置付近後方に次の競技者の待機場所を設け、呼び出しされる前にそこで待機しておくことを競技開始前に説明し、徹底しておくといよい。



6 競技

競技開始・終了時の旗の上げ方

すべてのフィールド種目

競技開始の合図



競技終了の合図



試技時間の厳守 (TR25.17)

すべてのフィールド種目

- ① 試技のできる準備が整った時点で競技者に指示し、その時点で時計をスタートさせる。競技者の都合に合わせる必要はない。
- ② 試技時間は状況に応じて細かく決められているが、競技者が公平に競技できるように配慮されたものである。表彰や他の競技で中断された時もこのことを考慮し、運用する。
- ③ 試技時間内であれば、一度始めた試技を途中で中断してやりなおすことができるので、試技が完了するまで時計を止めてはならない。競技者が試技を開始してから試技時間を超過しても、その試技は認められる。
- ④ 試技時間が残り15秒になったときから黄旗を水平に挙げ続けるかその他の方法で競技者に知らせる。
- ⑤ 試技時間が超過したら、黄旗を垂直に挙げる等の方法を用い、主審にタイムオーバーしたことを伝える。



タイマーの設置例



タイマーと黄旗

競技時間の変更

すべてのフィールド種目

- ① 競技の開始あるいは終了時刻が早くなったり、遅くなったりすることが予測される場合には審判長に報告する。
- ② 審判長は総務、進行担当総務員、その他関連部署と連絡を密にして競技運営に支障を生じないよう対処する。
- ③ 競技日程に記載してある競技開始時刻は大会の基本となるものなので、遅れをきたさぬよう注意する必要がある。

試技順と試技時間

すべてのフィールド種目

① 試技順

- (a) フィールド競技はプログラムに記載された順序で試技を行う。しかしながら、走高跳、棒高跳では、試技の成功・失敗に加えて、試技する権利を失った競技者やその高さをパスしている競技者が混在するため、プログラムに記載された順序通りに試技が行われるとは限らない。
- (b) TOP8による4回目以降の試技順は、前半の3回までの記録の低い順とする。5回目以降の試技順についても試技順を変更することが可能であるので、申合せ事項等を確認する必要がある。
- (c) 予選があった場合の決勝は新たに抽選して試技順を決める(TR25.5)。

② 単独種目における試技時間 (TR25.17)

残っている競技者数	走高跳	棒高跳	その他
4人以上※	1分	1分	1分
2～3人	1分30秒	2分	1分
1人	3分	5分	—
連続試技※※	2分	3分	2分

※ 4人以上または各競技者の最初の試技は1分とする。

※※ 単独種目・混成競技ともに、残っている競技者数が2名以上の時に適用し、走高跳、棒高跳では高さが変わった場合でも適用する。

【単独種目におけるフィールド競技の試技時間適用例：

棒高跳（大会記録5m20）】

	4m80	4m90	5m00	5m10	5m15	5m21
A	××○	×××				
B	○	×—	××			
C	○	○	××○	××—	×	
D	—	—	—	××○	××○	×××
競技者数	←4人以上→		←2～3人→			1人
試技時間	1分		2分			5分

〔注意〕

- 1 4m80, 4m90で試技したのは3人だが、権利を有するDが（パスして）いるので、4人以上の1分が適用される。
- 2 Aの4m80の3回目、4m90の1, 3回目は、高さが変わる場面も含め、それぞれ連続試技の3分が適用される。
- 3 Cの5m00の3回目、5m10の1回目も連続試技の3分が適用される。
- 4 Dの5m10の1回目は、最初の試技なので1分。2回目は2分。3回目は連続試技の3分が適用される。
- 5 5m15で、Cの試技が失敗した段階でDの優勝が決定したが、試技時間の変更は連続試技である場合を除き、バーが新しい高さに上げられるまで適用しない（TR25.17（注意ii））。従って、Dの1回目は2分。Dの2, 3回目は連続試技の3分を適用する。
- 6 Dの優勝が決まってからは、任意の高さで設定することが可能（TR26.4）。
- 7 Dの5m21以降は優勝が決まり1人になり、大会記録への挑戦となるので、1人の試技時間5分に1分を加えて、6分の試技時間が与えられる。
- 8 大会記録等にバーを上げた場合、競技者がバーに触れたらその都度高さを再確認する（TR26.6）。
- 9 混成競技の棒高跳における試技時間は、1人または連続試技の場合は3分で行うので注意しなければならない（混成競技のページ参照）。

風力測定

走幅跳	三段跳
① 踏切線から40m離れ、助走路のそばに置かれたマークを通過するときから5秒間計る。	① 踏切線から35m離れ、助走路のそばに置かれたマークを通過するときから5秒間計る。
② 競技者が40mより短い助走をする場合は、助走を開始したときから計る (TR29.12)。	② 競技者が35mより短い助走をする場合は、助走を開始したときから計る (TR29.12)。
③ 風向風速計は、踏切線から20mの地点に立て、助走路から2m以上離してはならない。高さはほぼ1m ²² とする (TR29.11)。	

競技者呼出し担当

すべてのフィールド種目
① 競技者が入場したら競技者数、氏名、ナンバーを記録用紙で確認し、競技上の注意事項と試技順を伝え公平に練習をさせる。 走高跳、棒高跳は足合わせの練習をさせた後バーを掛け2回程度練習させる。練習が終了したらその旨を主任に連絡する。
② 競技者にはナンバーと名前を呼び必ず意思表示をさせる。また、前の競技者が助走位置またはサークルに向かったら次の競技者に準備をさせ、競技進行がスムーズに行われるようにする。
③ パスをする競技者がいるので試技順を間違わないようにする。 なお、記録担当者と連絡をとりながら競技者名簿にそのつど記録を記入するとよい。
④ 予選を行う場合、標準記録を通過した競技者が出たときには順序が繰上がってくるので、そのむね競技者に伝え競技進行上支障のないようにする。
⑤ 終了した競技者には必ず助走マーカを片付けるように指導する。

フィールド競技の時間短縮

走幅跳、三段跳において、特に1ピットで多くの競技者が試技する場合は競技時間が長引き、終了予定時刻に終了しない例が少なくない。

通常は砂場など着地場所の準備が出来てからコーンを取り除くことや白旗で試技開始を知らせるが、できるだけ間延びせずに競技を進行させるための一つの方策として、呼び出しで先に競技者をピットに誘導し、それと同時に並行で砂場をならし着地

場所の準備を行うことで時間短縮を図ることができる。また、砂場ならしも手際よく行うことで更なる短縮が図れる。

加えて、粘土板の挿入部分が窮屈で、取り換えに時間が掛かるケースも多いので、スムーズな粘土板交換ができるよう競技開始前に入念にチェックしておくことも肝要である。

こうしてテンポよく競技を進行させることで、競技者の次試技への待ち時間も短縮され、全体の流れもリズムカルになり結果的に好記録への一助となることが多い。

2ピットでの粘土板の交換の仕方

粘土板を利用して走幅跳や三段跳を実施する場合、粘土の修復作業はダッグアウト下で行われることが多い。

そして、予選など2ピットで競技が実施されている場合、その交換方法をどのようにすればよいだろうか？

スタンド側のAピットでファールがあった場合、最短距離を移動して代わりの粘土板を運べばよいが、問題はトラック側のBピットで交換する必要が生じた場合である。Aピットを横断して届けるわけにもいかず、さりとて、Aピットの競技を中断させて交換させるのも得策ではない。動線としては、砂場の後方を回って運搬することになるが、赤旗が挙がってからの移動では、それなりの時間を要することになる。

そこで、お勧めなのが以下の方法である。

- ① 事前にBピット主審の脇に1台予備の粘土板を置いておく。
- ② ファールがあった際、主審は速やかに粘土板を交換する。
- ③ ダッグアウト下で待機していた補助員が、新しい粘土板を持って移動する。(Aピットの競技者の視界の妨げにならないよう注意が必要)
- ④ Bピット到着後、粘土板を交換してダッグアウト下に戻る。
(グラウンドレベルに机を用意して置き、競技者が痕跡を確認できるようにすると良い)

競技時間短縮のためにも、ぜひ工夫して頂きたい方法である。

試技順の呼び出し間違いの対応

フィールド競技はプログラムに記載された順序で試技を行うが、走高跳・棒高跳では試技の成功・失敗に加えて、試技する権利を失った競技者やその高さをパスしている競技者が混在するため、プログラムに記載された順序通りに試技が行われるとは限らない。そのため、係員による試技順の呼び出し間違いが起ることが少なくない。

そうしたトラブルのほとんどは、間違いが発覚した直後に「自分の順番ではないのに呼び出されて、慌てて試技をして失敗した。先ほどの試技はなかったものとして再試技をさせてほしい」という競技者や監督・コーチからの要求への対応である。

要求の採否は審判長の判断に委ねられ、競技者が不利益を被った場合には謝罪のうえ再試技を認めるのが妥当であろうが、事前呼び出し（何番準備）の段階から本人も了解し、十分な準備時間があつた場合には認めなくても良い。

「呼び出し間違いによる試技はすべて破棄し、再試技が妥当」との考え方もあるが、試技順間違いの発覚が遅れ、既に何人もの試技が終わっていた場合や間違った試技順において試技に成功した競技者がいる場合などを勘案すると、一律に再試技とするのが最善とは言いがたく、あくまでも「特定の競技者が不利にならない」という基本に照らした上で、要求の採否を判断すべきである。

競技を終えた競技者の退場の仕方

高さを競う種目で予選を行う場合、バーが上る度に脱落した競技者が出てくることになる。その場合、高さが変わるタイミング毎にマーシャルがミックスゾーンまで誘導して解散となる。

では長さを競う種目で予選通過標準記録を突破した者が出た場合は、どうすればよいだろうか？

ラウンド毎にまとめて誘導するという考え方も一理ではあるが、最初の方の試技者が予選をクリアーした場合、そのラウンドの最後まで待ち続けなければいけないというのも、場合によっては1時間近く待つことになり、何とも理不尽である。特に酷暑の中行われるインターハイや全日本中学選手権、あるいは雨天時の状況下など、競技者のコンディション維持にもかかわってくる。

また混成競技では、戦略上「記録さえ残れば良い、早く控室に戻って、次の種目に向けゆっくり休みたい」という意見も出てくる。

マーシャルの配置人数によって運用は異なるであろうが、一人ずつ退場させることを原則とし、せめて10人単位なり、前半・後半で分けて行うなど、柔軟な対応を心掛けたいものである。

7 予選と決勝

バーの上げ方

走高跳、棒高跳

- ① 走高跳は2cm以上、棒高跳は5cm以上の上げ方とし、上げ幅を増してはならない。
- ② 残っている競技者全員の同意があり、日本記録もしくは大会記録等を超える高さに挑戦する場合には、上げ幅を変えることができる (TR26.4.2 [国内])。

すべてのフィールド種目

- ① 標準記録を設定する場合、高すぎても低すぎても予選の意味をなさなくなるので慎重に協議して決定する。
- ② 当日の天候により標準記録を変更した方が良いと判断される場合は、審判長は最初の高さを変更する処置をとる。
- ③ 高さの競技では、練習時の競技者の状況を見て最初の高さに無理があると思われるときは、審判長は最初の高さを変更する処置をとる。

走高跳、棒高跳

走幅跳、三段跳、投てき競技

- ① 国内競技会では、参加者が24人を超えるときは予選を行う (TR25.9 [国内])。
- ② 3回続けて失敗していない競技者は、予選通過標準記録の高さの試技が終るまで試技を続ける (TR25.14)。
- ② 3回までの試技が許され、予選通過標準記録に達した競技者は、その後の試技は許されない (TR25.13)。
- ③ 予選通過標準記録に達したものが12人に満たなかった場合には TR25.15に従って追加補充する。

決勝、同記録1位決定の方法

走高跳、棒高跳

●決勝

少なくとも12人で行う (TR25.12)。

●同記録1位決定の方法 (TR26.8)

- ① 同記録の高さで試技数の少なかった競技者が勝者となる。

競技者	1.60	1.63	1.66	1.69	順位
A	×○	○	×○	×××	2
B	○	××○	××○	×××	3
C	○	×○	○	×××	1

- ② 同記録の高さで試技数が同じ場合、それまでの無効試技数の少ない競技者が勝者となる。

競技者	4.60	4.70	4.80	4.90	無効試技	順位
A	○	○	×○	×××	1	1
B	○	×—	×○	×××	2	2
C	×○	×○	×○	×××	3	3

- ③ それでも1位が決まらない場合に限り、同成績となった次の高さでもう1回の追加試技を行い、いずれも成功するか失敗して決定に至らなかった場合走高跳は2cm、棒高跳は5cmバーを上げ下げして差がつくまで行う（ジャンプオフ）。2位以下については行う必要はなく同順位となる。

- ④ ジャンプオフを行わないことの決定は、荒天等で競技続行が危険であると審判長が判断したときと、競技者が自発的に競技終了を申し出た場合のみである。

(走高跳)						追加試技			順位
競技者	1.95	2.00	2.03	2.06	2.09	2.03	2.01	2.03	
A	—	○	—	×—	××	×	○	○	1
B	○	○	×—	××		×	×		3
C	—	○	—	—	×××	×	○	×	2

[留意]

- 1：追加試技の最初の高さは同成績となった次の高さの2m03となる。
- 2：追加試技における試技数は各高さ1回のみである。
- 3：1位が決定した時点で追加試技を止め、競技を終了する。
- 4：追加試技で試技内容に差がつけば、2位以下の順位もそれに基き差がつく。
- 5：追加試技の記録が本戦の記録を上回った場合、それが優勝記録（2位以下も同じ）となる。本戦を下回った場合は本戦の記録となる。

走幅跳, 三段跳, 砲丸投, 円盤投, ハンマー投, やり投

●決勝

8人を超える競技者が競技を行う場合3回の試技が許され, その中で, 有効試技で記録を得た上位8人にはさらに3回(競技注意事項等で規定されている回数)の試技が許される。記録のない競技者は4回目以降の試技に進むことはできない。また, 競技者が8人以下の場合は, 競技注意事項等で規定がなければ, 4回目以降の試技に進むことができる。4回目以降の試技順は成績の低い順に行う(TR25.6)。

●同記録の場合の順位決定方法

- ① 同記録となった競技者の2番目の記録で順位を決める。
- ② それでも決められないときは3番目の記録により, 以下このようにして決める。

同記録の場合の順位決定方法(例)

	試技			3回目の 最高記録高	試技			最高 記録	順位
	1	2	3		4	5	6		
A	5m12	5m23	5m13	5m23	5m11	×	5m45	5m45	1
B	×	×	5m21	5m21	×	×	5m34	5m34	4
C	5m09	5m10	×	5m10	5m34	5m21	×	5m34	3
D	×	5m26	×	5m26	5m11	×	5m34	5m34	2

- ① B, C, Dの最高記録は5m34であるので, それぞれの2番目の記録を確認する。B, Cは5m21, Dは5m26であることからDが2位となる。
- ② B, Cの2番目の記録が同じであるので, それぞれの3番目の記録を確認する。Bは有効試技がなく, Cは5m10であることから, Cが3位でBが4位となる。

3 番目の記録で決着！（コラム）

21 世紀初頭，女子走幅跳で 2 人のスーパーアスリートが活躍していた。

前の日本記録保持者であり，現在歴代 2 位の井村（池田）久美子さん（6m86）と歴代 4 位の花岡麻帆さん（6m82）である。

2005 年の日本選手権の試技内容をご覧ください。

	試技						順位
	1	2	3	4	5	6	
花岡麻帆	6m30	6m40	6m57	6m61	6m43	6m69	2
池田久美子	6m24	5m02	6m60	6m41	6m69	6m61	1

3 回目以降逆転に次ぐ逆転で，最後の 6 回目池田さんが花岡さんの 2 番目の記録となる 6m61 を跳躍し，結果 3 番目の記録（6m60：6m57）で決着がついたのである。

仮に花岡さんの 3 回目が 6m60 であったならば，3 番目の記録も同じとなり 4 番目の記録（6m43：6m41）を比較して順位をつけることとなる。

コンピューターと連動しているマグボードであれば，瞬時に順位表示も出てくるが，手動の TOP8 板を操作する際には 2 番目の記録，3 番目の記録（あるいは 4 番目）で順位が変わることがあるので，注意が必要である。

跳躍競技で2ピットを使用するときの運用方法

〈一般種目：高さの跳躍種目の場合〉

出場人数が多い場合で予選を行うことが困難な日程の場合は2つのピットを用いて決勝を行わざるを得ないことがある。そのような場合に上記、混成競技と同様な方法で実施する場合もあるが、決勝というチャンピオンを決める場であることからできるだけ公平な試技の機会を与えるべきとの考えもある。そこで高さが上がって跳躍人数が減ってきて、1つのピットが4名未満になった時、予めAピット（1組）→Bピット（2組）の順として試技順を決めておき、その順番に試技をさせると良い。全体では6名以上いることになるので走高跳では、試技時間は1分のままとする。両ピット合わせて4名未満となったときに初めて試技時間に1分30秒を適用する。

この場合は両ピットのバーの上げ方について特段の注意を払い、バーを上げるタイミングがほぼ同時になるように運用すべきである。

〈一般種目：距離の跳躍種目〉

同じく走幅跳・三段跳を2ピットで同時に行うときは3回目まででTOP8を決め、4回目以降にピットを1つにまとめて実施する場合と、ピットは2つのまま試技順だけを成績の低い方から高い方へと実施していく方法がある。基本的には後者の方法を推奨する。ピットを1つにまとめるとそこで再び助走練習が必要になることがあるからである。

走高跳の競技開始前の練習設定とバーの上げ方の試み

〈競技開始前の練習設定〉

世界選手権やオリンピック等 WA が主催する競技会では、競技開始前の公式練習方式は用いず、バーを上げていきながら各人に自由練習時間を与える形式になっている。公式練習方式はインターハイなど出場者数の多い競技会では効率よく、しかも混乱なく練習時間を終えて競技を開始するという点で大いにメリットがあると思われるが、選手強化という観点では、身につけたウォーミングアップ方法を国際競技会に出るときだけ海外のやり方に合わせるとするのはむずかしい。そこで例えば、練習跳躍を 2m10 で 15 分、2m15 で 10 分、2m20 で 10 分、そして競技開始は 2m10 からといった運営方法で、競技者のウォーミングアップ方法を国際競技会でのやり方に慣れさせることも必要であろう。

〈バーの上げ方〉

国内では慣例的に 5cm と 3cm の刻みが多く使われてきたが、競技規則では「2cm より少ない上げ方はできない」「上げ幅を増してはならない」と定めているだけであり、これさえ守っていればいろいろな組合せ方が可能である。オリンピックや世界選手権はもちろん海外サーキット大会でも 5cm — 4cm — 3cm — 2cm とバーの上げ幅を少なくしていく設定方法が多く実施されている。

理由は、選手がパスしやすいバーの高さの設定にし、見応えある試合展開を引き出すためである。特に勝負所の高さになると、3cm 刻みではパスしづらいが 2cm ならパスをして次の高さに懸けるといった駆け引きが可能である。ヨーロッパの試合では上位陣が勝負所でのパスの応酬によって最後まで誰が勝つのか分からない見応えのある試合が展開されている（前ページ表参照）。

時間的にゆとりのある競技会で、こうしたバーの上げ方を採用すれば競技の面白さが増すに違いない。

8 判定・計測

フィールド審判員

① 判定員

- (a) 主任，進行担当総務員，アナウンサーと連携して練習開始，競技開始の合図と，終了時に終了の合図をする。
- (b) 走幅跳，三段跳は座位で判定し，それ以外の種目では，踏切，バーのクリアランスがきちんと確認できるように立位で判定することを原則とする。ただし，長時間にわたる場合，疲労度を軽減するために，座位で行っても構わない。

② 有効試技・無効試技

判定員は，有効試技は「白旗を挙げ」，無効試技は「赤旗を挙げる」（有効「よし」無効「だめ」の発声はしない）。

- (a) 走幅跳，三段跳の有効試技は，踏切線を越えていないこと，および着地後砂場からの退出動作を確認した上で白旗を挙げる。
- (b) 無効の判定の場合には競技者が踏切りの痕跡の確認に来ることがあるので，粘土板などの補修には十分注意し，次の競技者に対し支障のないようにする。

③ 投てき種目での落下地点判定員は，速やかに落下地点に行き正しい痕跡を確認する。白旗・赤旗で合図する必要はない。

落下地点の痕跡は，計測の後ただちに整地する。

- (a) 投てき物が角度線の外に落下した場合は，「角度線外である」ことをまたやり投においてはやりが頭部から着地しなかったと判断した場合「無効試技である」ことをそれぞれ合図する。
- (b) 予選で予選通過標準記録を超えた場合は，両手を頭上に挙げ円状に作る。
- (c) 円盤は常に自分の2m以内に落下させるよう，円盤に向かって走っていくように心がける。落下地点近く（2m以内）の真横で確認することがポイントである。

④ 計測の際にはその場に立会い，記録の読み取りが正確であることを確認する。

フィールド競技における旗の挙げ方降ろし方

跳躍競技では踏切地点に判定員がおり、助走から踏み切り、着地そして着地場所からの離脱を確認して、その跳躍が有効か無効かを判断している。通常、違反があった場合はその時点で無効試技が成立するので、即座に赤旗を挙げている。長さの跳躍種目における有効試技は着地場所を正しく離れなければ成立しないので、正確にはそこまで確認すべきであろうが、計測や表示の競技進行を考慮して、その後の動作で違反がないと予想される場合には離脱動作の途中で有効の白旗を挙げるのはやむを得ない。

投てき競技でも同様で、特にやり投の場合にいつまでも助走路を離れない競技者に対して2008年度の規則改正で助走路の着地場所側から4mよりも後方に下がっている場合は助走路内にいても助走路を離れたとみなすことになった。

いずれにしても有効・無効を表示する判定員の旗挙げ動作は観衆の注目するところでもある。きちんとした動作で、わかりやすく挙げおろしする必要がある。また、一瞬で旗をおろしてしまつては有効なのか無効なのか記録が表示されるまではっきりしないこともあるので、旗を挙げたら一呼吸置いてからおろすようにすると親切である。

投てき競技の判定においては、通常着地場所側の旗は使用しない。やり投において、やりが頭部から着地しなかった場合も含め、着地判定員は無効試技を合図で知らせることとする。

粘土板の角度を 90 度にして判定する理由

これまで走幅跳および三段跳において、粘土板に痕跡が残ればファールとしていた。逆につま先が垂直線より先に出ていても、痕跡がなければ白旗を挙げて有効試技としていたわけである。

しかしながら、昨今ビデオ判定が普及し、あわせてテレビのライブ映像でも踏切の状況が場内の観衆や、世界中のお茶の間に届けられるようになるにつれ、「つま先が出ているのになぜファールじゃないのか？」という素朴な疑問がよせられるようになってきた。

こうした流れを受け2020年11月からWA主催競技会では、すべてビデオ判定が導入されることになった。その判定の根拠は「踏切線の垂直面より前に出たらファール」というものである。もちろん国内ではすべての競技会でビデオ判定を導入できるわけでもない。ビデオ判定ができない場合は粘土板を使用し改定の主旨に則り、粘土板の角度をこれまでの45度から90度に変え、つま先が踏切線の垂直面より先に出た際には痕跡が残り、しっかりと判定できるようにすることが必要である。

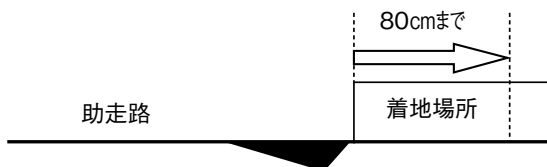
なお、ビデオ判定を採用する場合でも、機器の故障に備えて粘土板は用意しておくべきである。

① 計測

- (a) バーを新しい高さに上げたとき、競技者が試技を開始する前にその高さを計測する。世界記録、日本記録（含む U20・U18 記録）に挑戦している競技者がバーに触れた場合は、次に行われる試技の前に複数の審判員でその高さを再計測する（TR26.6）。バーを交換した時も再計測しなければならない。
- (b) 地面から垂直にバーの上部の一番低いところで計測する（TR26.5）。

② 計測員（支柱）

- (a) 最初にバーを掛けるときには左右の支柱の目盛りを正確に合わせしておく。
- (b) バーの上げ下げに際し 3cm、6cm と目盛りを見ながら高さを調整すると良い。
- (c) バーはいつも同じ方向に掛け、支柱とバーの間は少なくとも 10mm 開ける（TR27.9）。
- (d) 試技前に風などでバーが揺れている場合は、バーの片側を手で軽く上げて揺れをとめてやる。
- (e) 棒高跳の支柱の移動は、競技開始前にあらかじめ競技者から申告されているので、それによって移動する（競技中でも申告は可能であるが、その移動は試技時間に含まれる）。



③ 計測員（バー掛け、ポール受け）

- (a) 落下したバーをバー止めに掛ける。
- (b) 棒高跳では支柱移動の際にバーが落ちないように支える。
- (c) 棒高跳ではポールの倒れる方向が定まらないうちに触れてはならない（TR28.4）。

④ 高度計・科学計測装置

- (a) 高度計の目盛りを正しくセットし、計測の場合に高度計の先端とバーとの接触に特に注意する。
- (b) バーを掛け左右の高さを調整しながらバーの最下点で高度計を垂直に保つように基盤に置き、高さを正確に合わせてバー止めを固定する。

- (c) バーが折れたり、バー止めが動いてしまった場合等は、再計測する可能性があるため、次の高さに変わるまで高度計の高さを動かしてはならない。
- (d) 科学計測装置を使用する場合には、競技開始前に振動などで誤差が生じない場所に装置を固定し、使用方法を熟知して計測に支障のないようにしておく。
- (e) 棒高跳では、計測する場合必ず支柱の前後位置を0点へ戻してから計測する。
- (f) 棒高跳では、バーが上がるに従って高度計の重量のため目盛りが下がる場合があるので、高度計のネジをしっかりと締めて毎回盛りを再確認することが大切である。

跳躍種目	投てき種目
------	-------

- ① 計測
 - (a) 距離は1cm未満の端数を切り捨てて記録する（TR29.8, TR32.19）。
 - (b) 跳躍種目では足跡や痕跡が同じような距離に2カ所あり、どちらを採用するか判断できない場合は2カ所とも計測する。
- ② 計測員（踏切線側）
 - (a) 着地点巻尺の目盛りをあわせて踏切線との最短距離を踏切線に対して直角に巻尺を当てて計測し記録を読み上げる。その際、記録担当員の復唱を確認する。
 - (b) 科学計測装置等の計測装置を使用する場合には、競技開始前に振動などで誤差が生じない場所に計測器を固定し、使用方法を熟知して計測に支障のないようにしておく。
- ③ 計測員（着地側）
 - (a) 着地点の足跡または手などの痕跡を正確にとらえ、機敏に踏切線に近い方の痕跡に計測用のピンを垂直に刺し、巻尺の目盛0を合わせて固定する。巻尺は一直線にし、ねじれ、たるみがないように引っ張る。
 - (b) 踏切側の計測員は巻尺を強く引っ張るので、着地点側はしっかり手と足先（踏みつけない）で巻尺を保持する。
 - (c) 跳躍ごとに跳躍距離、投てき1投ごとに距離を計測する（TR29.9, TR32.20）。
- ④ 科学計測装置
 - (a) 科学計測装置（光波距離計測装置）を使用する競技会では競技役員編成に際し、科学計測員として独立させ任務分担を明確にする。
 - (b) 科学計測員は、その装置が正しく作動していることを確かめるため競技開始前に審判長立会の上で鋼鉄製巻尺を使って距離を（2～3カ所）計測し、その結果が一致することを確認め、装

置が正しく作動するよう管理する（特に振動に注意）。また競技終了後は、鋼鉄製巻尺を用いずに確認を行う。確認作業に関わった全員の署名を付した適合確認書を作成し、成績表に添付する（科学計測装置の作動確認参照）。

- ⑤ 科学計測装置を使用する場合は、反射鏡は正しく痕跡の真上でサークルまたは円弧に最も近い地点に正確に置く。

判定

走高跳・棒高跳

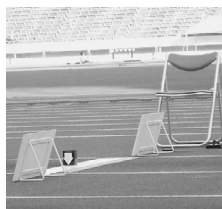
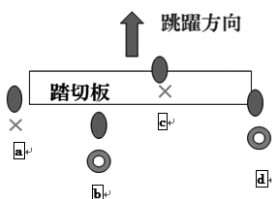
- ① バーの落下の判定について特に注意しなければならないのは、競技者の身体がバーに触れて落下したのか、風によるものかを十分見きわめてから旗を挙げる。明らかに風の影響で落下したものであるならば無効試技とはしない。
- ② 走高跳において、試技を中止しようとして支柱に触れた場合には1回の無効試技となる。
- ③ 棒高跳において、試技を中止しようとしてポールがストップボード上部内側垂直の先の地面あるいは着地場所に触れた場合には、1回の無効試技となる（TR28.2）。
- ④ 棒高跳において、ポールをボックスに突っ込まないで跳んだ場合は無効試技である。
- ⑤ 棒高跳において、身体がバーを越えても倒れかかったポールがバーまたは支柱にあたりバーが落ちた場合は無効試技である。
- ⑥ 棒高跳において、身体がバーを越え、手から離れたポールがバーの下をくぐり着地場所に倒れた場合は有効試技である。



棒高跳 基準面ライン

走幅跳・三段跳

- (1) 踏切板付近の有効試技・無効試技の判定



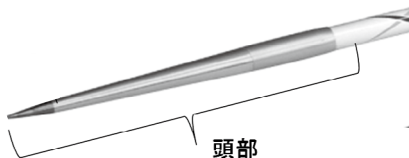
- (a) 踏切足が助走路外にあり無効試技。
 - (b) 踏切足が走路内にあり有効試技。
 - (c) 踏切足が踏切線の先の地面に触れているので無効試技。
 - (d) 踏切足が踏切板にかかっている場合は有効試技。
 - (e) 靴本体でなく、靴紐など靴の緩んだ部分が踏切版の垂直面より前に出た時は無効試技とはならない (TR30.1.1)。
- (2) 着地の有効試技、無効試技の判定
- (a) 踏切板から砂場までの区域は助走路とはみなさない。
 - (b) 三段跳では、ホップとステップの着地位置が助走路の外であっても無効試技とはならない。
 - (c) 三段跳では、競技者が試技中に使っていない方の足が地面に触れても無効試技とはしない (TR31.2)。
 - (d) 片足で着地を行った場合でも、規定されている違反がなければ有効試技である。
 - (e) 片足が砂場の外に触れた場合、砂場の足跡の方が踏切線に近ければ有効試技であり、砂場の外の足跡が砂場の着地痕跡より踏切線に近ければ無効試技となる (TR30.1.5)。
- (3) 試技のやり直し (TR25.18)

審判長の判断により試技のやり直しが生じた場合、試技順の変更は認められない。しかし試技が進行していた場合にはその時点でその他の試技が行われる前に行う。

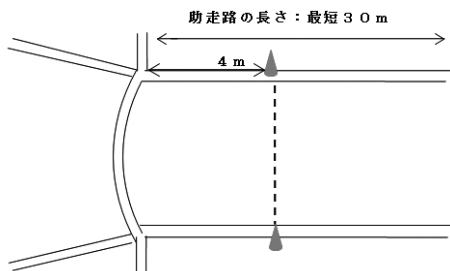
投てき種目

(1) やり投

- ① やりの頭部が他のどの部分よりも先に地面に落下し、はっきりと見える痕を残した場合のみ有効とする。やりの頭部から落下したかどうかの判定はできる限り真横から見ることである。常に真横から見る訓練と、競技者の練習時を通してどの辺りにやりが落下するかを見ておくことが、より近い距離で判定するのに役立つ。判定は速やかに正確に行う。



- ② 競技者がやりを投げてから転んだとき、スターティングライン円弧の内側助走路内であれば有効試技である。
- ③ 投てき動作中に、やりまたは身体の一部がスターティングラインに触れたとき、または助走路の外側の地面に触れたときは無効試技となる。
- ④ やりが地上に落下するまで助走路を離れてはならない。
- ⑤ 有効試技は助走路を正しく離れた場合に成立するが、助走路内であっても、スターティングラインから4m後方の仮想ラインから後方に下がったときは正しく助走路から離れたとみなして良い (TR32.17.2)。



(2) 角度線上の判定

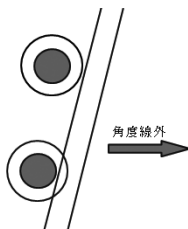
砲丸・円盤・ハンマーは頭部、やりは先端部分の落下痕跡が有効角度線の完全に内側でなければ有効試技にはならない。

ハンマーの接続線とハンドル、やりの先端以外の部分は有効角度線に触れたり、そこから出たりしても差し支えない。

(●印は痕跡を示し、○印は頭部の直径を示す。)

頭部も角度線内にあり有効

接地しなかった頭部が角度線にかかっているが、痕跡は角度線内にあるので有効



- (3) 砲丸投, 円盤投, ハンマー投においてサークルに入り, 再びサークルから出た場合の判定

サークル内に入ってもまだ試技は開始されていないか, 試技を始めてから急に動作を中断し一度サークル外に出ても, 規則に反しない限り無効試技とはならず, 試技時間内であれば試技を続けることができる (TR32.15)。

- (4) 砲丸投

砲丸は, あごまたは首につけるか, あるいはまさに触れようとする状態に保持する。両肩を結ぶ線より後方にもっていったいないかを注意する。

落としたメガネの扱い方

砲丸投の投てきの際, 勢いあまってかけていたメガネがずり落ち, 落下区域内に落ちてしまった。この時の措置はどうすればよいだろうか?

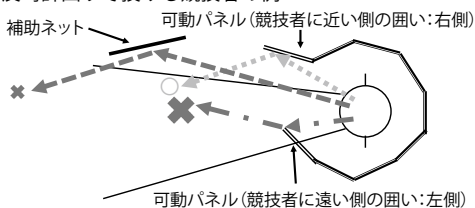
メガネや帽子, ハチマキなどは身体の一部とは見なさないから, これだけでは違反行為とはならない。また, サークル内に留まっている競技者が腕を伸ばし, 地面に触れないようにメガネのふちをつまみあげて取っても問題とはならない。しかし, 体の一部分でも足止め材の先の地面に触れてしまったのならば, 赤旗を揚げざるを得ない。

競技者の立場で考える適切な対処としては, まずサークルの後方から正しく出て, 試技を完了させること (白旗が挙がる)。その後には審判に断りを入れてとりに行くべきである。経験の浅い中学生や高校生が出場している競技会などでは, 主審が「まず, 後ろから出て, そのあと拾いなさい」と教育的配慮を持って指示することも時には必要である。

円盤やハンマーの頭部が囲い等に当たった時の判定 (反時計回りで投げる競技者の場合)

- ① 競技者の投げた円盤またはハンマーの頭部がサークルの周りに設置した競技者に近い側（着地場所に対して右側）の可動パネルを含む囲いに当たって角度線内に落下した場合、競技者が正しくサークルを離れたときは有効試技とする。囲いに可動パネルがなく、補助ネットで代用した場合も同様である。しかし、競技者の投げた円盤またはハンマーの頭部が競技者に遠い側（着地場所に対して左側）に当たった場合は無効試技とする。
- ② 囲いから離れた位置に設置した補助ネットに当たって角度線内に落下した場合は、無効試技とする。
補助ネットはトラック競技の競技者や審判員、観衆を保護するために、設置したものである。
- ③ 距離を示す表示器に当たり、角度線の中に落下した場合は、無効試技とする。距離を示す表示器は角度線の外に置いてあるものである。

反時計回りで投げる競技者の例



上図はハンマー投における反時計回りで投げる競技者用の設定であり、時計回りで投げる競技者の場合は可動パネルの開閉を逆にする。

記録担当と注意事項

跳躍審判員	投てき審判員
① フィールド競技の記録は記録担当の審判員が行う。記録は少なくとも2人の審判員がすべての試技を記録し、点検しなければならない（CR19.4）。 ② 記録の聞き間違い、書き間違いは大変な混乱を生じるので、復唱して記入する。復唱は正しくはっきり大きな声です。 ③ 誤記入を防ぐため、成績は2人の審判員（含：記録用端末担当）によって個別に記録すると良い。また記入のつど記録は相互確認することと、常に競技者のナンバー（アスリートビブス）を確認する。 ④ 定められた記号（記録なし：NM、失格：DQ、成功・有効試技：○、失敗・無効試技：×、パス：—、試技放棄：r）を使う（CR25.4）。 ⑤ 高さの新記録が試みられるときは、アナウンサーならびに審判長に連絡する。また、長さの跳躍や投てき種目で新記録が予想されるときも同様である。 ⑥ 記録用紙の整理の仕方 (a) その競技者の一番良い成績を○で囲んで「3回の最高記録」の欄に写す。記録会等、試技が3回で終了する場合は、「最高記録」の欄に一番良い成績を○で囲んで記入する。 (b) TOP8を選ぶ場合はまず「3回の最高記録」の欄の中から記録の良い順に8人を○で囲み、次にナンバー、氏名と所属を○で囲む。 (c) TOP8の最後の通過順位に同記録がある場合には2番目の記録を比べ、それも同じ場合には3番目の記録を比べて決める。それでも同じならば、同成績として9名で残り3回試技を行う（TR25.22）。＜次ページの表参照＞ (d) TOP8による4回目以降の試技は、それまでの各自の最高記録に基づき、記録の下位の者から行う。試技順を所定の欄に記入し、競技者呼出し担当者と確認のうえ、競技者に周知する。 (e) 後半の3回で記録が伸びたらその中で一番良いものをまた○で囲む。常に一番右の○で囲んだ記録が、その競技者の最高記録となる。それを記録の欄に写して順位を決定すると正しく早く整理ができる。 (f) TOP8を速やかにアナウンサーに連絡するとともに、競技者へ発表する。 (g) 競技終了後は走幅跳、三段跳の場合、風力計測員からの資料を記録用紙に記入する。 (h) 日本記録、大会記録などが出た場合は備考欄にそれを記入し、審判員主任の確認をとり、最後に審判長のサインを得たうえで、記録・情報処理員に提出する。	

番号	氏名	所属	1	2	3	3回の 最高記録	TOP8 の試技順	4	5	6	記録	順位	備考
	a	A	15.04	15.24	×	15.24	6	15.18	×	×	15.24	3	
	b	B	15.21	15.49	15.61	15.61	8	15.70	15.41	15.71	15.71	1	
	c	C	15.30	15.36	15.28	15.36	7	15.46	×	15.33	15.46	2	
	d	D	13.47	×	14.65	14.65	3	×	14.81	14.70	14.81	6	
	e	E	14.73	14.75	14.80	14.80	4	15.08	15.10	×	15.10	4	
	f	F	13.83	14.06	×	14.06							
	g	G	×	×	×	N M							
	h	H	14.56	×	14.50	14.56	2	×	×	14.38	14.56	8	
	i	I	13.57	13.39	14.26	14.26							
	j	J	14.76	14.83	14.75	14.83	5	14.86	14.99	15.02	15.02	5	
	k	K	14.13	14.30	14.46	14.46							14.30
	l	L	14.26	14.40	14.46	14.46	1	14.56	14.67	×	14.67	7	14.40

TOP8の最後の通過順位に同記録があるため2番目の記録によって通過者を決めた例

情報機器を用いた大会の4回目開始時間の短縮

情報機器を用い、フィールド競技の現場にPCを持ち込んで記録を入力管理している場合には、紙への控え記録とPC入力の確認は都度行っていればTOP8の確認は読み合わせる必要はなく、情報機器につながっている記録表示板を見て競技者に試技順を伝えて遅滞なく4回目を開始するとよい。

記録用紙記入記号「r」（試技放棄・離脱）

1. フィールド競技において、まだ試技する権利を有しながら、競技者からその時点で権利を放棄して競技を終了するとの申し出があった場合には、記録用紙に「r」を記入する。
2. 自分の優勝が決まったため、その時点で競技を終了する場合
3. 他種目への出場を兼ねているなどの理由により、体力の温停を図る場合。
4. 始めのうちの試技で大記録を達成したことで満足し、以後の試技を放棄する場合。

試技放棄を確認して「r」を入力した後は、どのような理由があろうとも当該競技者は試技を再開することはできない。

また、試技放棄をした時点での有効記録ならびに試技内容が、1位と同成績であっても1位決定戦に参加することはできず、第1位決定戦に参加した競技者の次の順位となる。

〔留意点〕

1. 競技場所へ入場した後、競技開始前のウォーミングアップで怪我をするなどして、最初の試技を行う前に出場を断念した場合は「棄権 (DNS)」として扱い、「r」は用いない。
2. 走高跳と棒高跳で優勝が決定し、次の高さの試技を行わずに競技を終了すると競技者が申し出た場合は、競技注意事項で定められた上げ幅に基づき競技を終了した次の高さを入力し、その欄に「r」を記入する。

フィールド順位・記録表示版の有効活用

走幅跳・三段跳をはじめ投てき種目においても、競技の進行状況を進行担当総務員、アナウンサー、競技者、観衆(含む指導者)などに伝達する一つの方法として、「フィールド順位・記録表示器」(TOP8板)がある。浸透した「TOP8」という通称から、この表示板はTOP8が決定した後の試技(4回目以降)から使用されることが多いが、予選時や決勝の1ラウンド目から使用することが望ましく、伝達効果は非常に高い。また、砲丸投だけでなく、ペグでの表示が見づらい他の投てき種目においても効果的である。

【予選の時】

予選の時の使用は原則的に予選通過標準記録を突破した競技者の「ナンバーと記録」を表示する。

写真は平行して行われる予選において、予選通過標準記録を突破した競技者のナンバーと記録を表示している。その他、気象条件や予選通過標準記録が高



予選通過標準記録突破者を表示

く突破者が12名より少なくなる可能性が考えられる場合、予選通過標準記録に近い競技者も表示することもある。

この時、予選通過標準記録突破者は赤色チョーク、それに近い競技者は白色のように区別し、表示板の表と裏に記入する。この場合、表示板の上方にある順位板は使用せず裏返しにしておくが、表示は記録順にする。

【決勝の時】

1ラウンド目から、この表示器を使用して順位と記録を表示することを推奨する。数に余裕あれば、出場者全員の記録を表

示できればなおよい。

配置場所は各ピットの記録表示器の近くに配置する。トラックの外側のピットを使用する場合は見えにくい場所があるので進行担当総務員席、アナウンサー席や観客席から見やすい所に工夫して置く。



TOP8の表示



決勝12名表示

フィールド内における審判員等配置の人数

近年フィールド競技においては、電子機器や運搬装置等の普及により審判員及び補助員の配置人数を減らす方向にある。国際大会では著しくその傾向が見受けられ、今後の国内競技会においても、TV放映、観客対応等を考慮する観点から、運営に支障をきたさない程度に配置人数を減らす工夫をする必要がある。

フィールド順位・記録表示板の使用

一般的に「TOP8板」と呼ばれるこの順位・記録表示板は走幅跳や三段跳のみならず、砲丸投、やり投等の投てき種目にも、1回目の試技からフィールド順位・記録表示板を使用することを推奨する。

順位・記録表示板の前に役員や補助員が立つとスタンドから見えないので、板の裏側に①試技順②ナンバー③記録④セカンド記録を記入しておくのである。こうすれば前に出て確認しなくても、記録・順位の変動があった場合すばやく対応できる。また数字の印刷されたマグネットシートを利用すると見やすいが、ない場合は黄色のチョークを使いできるだけ太い文字で表示するとよい。



A, Bで行われる跳躍競技配置、電光表示板の使用例



A, B合わせた TOP8の表示 (岩手国体)

少年女子共通 三段跳 決勝 上位8名			
1位	38	12m49	5位 11 12m26
2位	13	12m36	6位 37 12m13
3位	27	12m30	7位 22 12m06
4位	17	12m27	8位 26 12m04